



Title	「東」と「西」－文化相対主義と普遍主義(1) : 理論的試み
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2003, 2002, p. 53-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「東」と「西」——文化相対主義と普遍主義 (1)

——理論的試み——

伊勢 芳夫

1. 「東」と「西」、そして日本

“[Li Ku Yu s]aid that white people are a freak! ‘like white mice’, not a permanent type; hence we [white people] produce a shudder in the yellow breast. And you know that old sixpenny atlas which is his Bible—he produced that to show me that Europe and Asia are just like twins in structure; and he calls the two islands, England and Japan, the negative and positive terminals of a cell, the continents being the plates, Europe the white zinc, Asia the yellow copper”.¹

江戸時代末期、日本は西欧文明の衝撃的な介入から 250 年続いた鎖国を終焉させて、世界の舞台に登場したのであるが、それからわずか 30 年余りの後には、「東の脅威」として、西欧諸国に立ちはだかる存在になっていたのである。この新たな「西」と「東」の構図、つまりイギリスと日本、白人と黄色人種の構図は、イギリス人小説家 M. P. Shiel の *The Yellow Peril* からの引用のなかで、ボルタ電池の比喻によって興味深く捕らえられている。もっともこの「東」と「西」の、シンメトリーで対等な構図は、登場人物の中国人 Li Ku Yu の願望であり、彼は、近代化した日本に倣い中国も近代化し、その二つは共闘して、やがてヨーロッパを植民地化する野望を持ち、実行しようとするのであるが、この中国人の野望はもちろん挫折させられるのである。この作品は、ドイツ皇帝 Wilhelm II の黄禍論に端を発した、中国・日本がヨーロッパに追いつき、追い抜き、遠からず仏教徒がキリスト教国を侵略し植民地化するという危険性に対する警鐘を鳴らしている。²ここで注目すべきことは、まだ非白人に対する人権意識も、民族自決の考え方も希薄な時代、人種的偏見が横行し植民地主義が支配的な時代にあって、軍事・産業における近代化を成功させ、1905 年にはロシアとの戦いで勝利するまでに強国となった日本の存在によって、敵対視するにせよ積極的に

¹ M. P. Shiel, *The Yellow Peril* (London: Victor Gollancz Ltd., 1929), p. 14. この作品は、最初、*The Dragon* というタイトルで、1913 年に出版されている。

² この脅威そのものは、現在でも決してなくなったわけではないのは、Samuel P. Huntington の *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order* (Touchstone Books, 1998) を読めば分かるであろう。

評価するにせよ、主体性を持った「他者」として「東」をみざるをえない状況が生まれてきたことである。実際、19世紀末あたりから、Wilhelm IIやShielのような「東」と「西」の意識がはっきりと西欧の言説に現れ始めている。Kiplingの詩“The Ballad of East and West”(1889年)といった非常に有名なものから、数多の紀行文や新聞雑誌に至るまで、調べれば数限りなくみつかるとであろう。反動的か革新的かは別にして、そこには、欧米人の意識において、世界の様々な人種が文明や近代化の達成度という尺度で段階的に配列された縦の構造から、部分的にはあるにせよ、より対等な横の関係へと再編成されつつあるという変化が起こっていることが窺えるのである。

2. 日本人の「東」と「西」の意識

「ここから見ると、やはり日本は世界の果てだな。」

と矢代はふと歎息をもらして云った。

「そうね、一番果てのようだよ。」

「あの果ての小さな所で音無しくじっと坐らせられて、西を向いてよと云われれば、いつまでも西を向いてるのだ。もし一寸でも東は東と考えようものなら、理想という小姑から鞭で突つき廻されるんだからなア。へんなものだ。」³

「あなたは、僕たち東洋人が知識の普遍性を求めて苦しんでいるときに、事物や民族の特殊性ばかりを強調しようとするんですよ。その点あなたは矢代と同じですね。矢代はまだあなたのように落とし穴を造らないけれども、あなたと話をしていると、言葉の一般性というものが役に立たなくなるんですよ。実際あなたはほど非論理的な人を、僕はまだ見たことがありませんね。そんな所に僕は進歩があるとは思えない。無茶だあなたは。」⁴

日本が、近代化した西欧に接することによって受けた衝撃は、今日からは想像ができないほど大きいものであったのに違いない。世界の中心であった中国が、イギリスという西の辺境の国家によって惨敗させられたことが、日本人の世界観を激しく揺るがしたことは想像に難くない。さらに遣欧使節がヨーロッパの都市を実際に見ることによって、「西欧近代」というものすごさを肌で感じたことであろう。ただこれだけでは、日本が他の非西欧諸国に先駆けて近代化に成功したことの説明としては不十分であろう。インドでも、中国でも状況は同じであったからである。むしろインドなどでは、明治維新のときにはすでに、英語による教育が始まって30年経つのであり、英語の読み書き能力を持つインド人知識階級が誕生していたのである。平川祐弘は、夏目漱石の「維新前の日本人は只管支那を模倣して喜びたり、維新後の日本人はまた専一に西洋を模倣せんとするなり」という言葉を敷衍し

³ 横光利一、『旅愁 上』(講談社、1998)、166頁。

⁴ 『旅愁 上』、184頁。

て、日本が長い年月中国文明の積極的な受容者であったことが、西欧文明の受容者としての基礎を作り上げていたという考えを示しているが、⁵しかしながら、日本のように先進文明を長期にわたり受容していた国は他にも多くあるであろう。日本がいち早く近代化を達成したことについては、それ以外にも日本の宗教、天皇制等から色々な説明が可能であろうが、その理由はともかく、日本人が江戸時代を通して、「西欧近代」をある程度理解し、評価し、羨望を感じる精神構造を形成していたということは確かなことである。

この「西欧近代」をある程度理解し、評価し、羨望を感じる精神構造は、日本人に近代化・西欧化への強い意欲を掻き立てたが、一方、同時に焦燥感と劣等感を感じさせることとなった。そして、上に引用した横光利一の『旅愁』は、日本人のそのような心理を実に見事に表している。ところで、この日本人が西欧人に感じてきた劣等感は、太平洋戦争の前と後では、かなり変質してしまったようである。興味深いのは、ある程度まで、戦前が O. Mannoni のいうところの “inferiority complex” で、戦後は “dependence complex” に相当するように思われる。⁶

『旅愁』においては、フランス旅行をする日本人の異文化体験を描いた部分と、彼らが日本に帰国してからを描いた部分からなる、未完の小説である。二人の登場人物、矢代と久慈は、それぞれ日本主義者と欧化主義者である。彼らはフランス滞在を通して激しく議論するのであるが、その議論はまさに明治以来の日本の思想界で激しく戦わされた議論の縮図なのである。最初の引用の部分は、矢代が千鶴子という女性に語った言葉であるが、彼は日本という国家が、その歴史的に培われてきた文化形態を、そのものとして認められない当時の——作品の時代設定は、二・二六事件の頃である——歴史状況を嘆いている。日本というものが、東アジアという文脈で培われてきたことを認めることが恥であると感じる日本の時代状況に疑問を感じているのである。一方、もう一つの引用は、久慈が東野という作家に対して怒りをぶつける場面であるが、そこには彼の「西欧近代」に対する考え方が端的に表明されている。つまり彼にとって、「西欧近代」というのは、人類普遍の真理によって構成されているというのである。したがって、日本は欧米先進国の言葉で語り、彼らと普遍的な価値を共有することで、近代国家の仲間に入ることの必要性を説く。「日本」を語ることは、「事物や民族の特殊性ばかりを強調」することになるのである。

矢代の希望は、三宅雪嶺や陸羯南のような、日本がその伝統を失わずして西欧と伍する存在になることであるのに対して、久慈は、青年期の徳富蘇峰のように、日本が普遍的価値を共有する「近代国家」の仲間入りをすることを希求しているのである。もっとも、この『旅愁』という作品は、その二つの考えの単純なやり取りが描かれているのではなく、一

⁵ 『和魂漢才の系譜——内と外からの明治日本』(河出書房新社、1987)の48頁で、平川は次のように記している。「このように長期的展望にたつて眺め、対外文明への一国民の心理の型が継続するものであると仮定すると、日本では『和魂漢才』の心理的先縦があったからこそ『和漢洋才』の公式もたやすく生まれ、それが日本の近代化に際して有利に作用したのであろう、ということが考えられる。」

⁶ O. Mannoni, *Prospero and Caliban: The Psychology of Colonization* translated by Pamela Powesland (The University of Michigan Press, 1990), pp. 39-48 を参照。

方で「日本」というものの実体のない危うさを感じつつ、また他方で、フランスの伝統文化、そして白人の人種的偏見といったヨーロッパ世界の事物や民族の特殊性を登場人物が経験することで、二人の主要登場人物の心の揺らぎや葛藤が描かれているのである。

このような日本人の「東」と「西」の意識は、森鷗外や夏目漱石を初め、世界を視野に入れた日本人の言論のなかに、数多くみられるのである。

3. 「東」と「西」の意識の、理論的考察

これまで述べてきたように、19世紀末から20世紀にかけて、欧米に流布する言説においても、日本に流布する言説においても、「西」と「東」の意識は前景化され、先鋭化されてきた。ところで、「西」と「東」といっても、それらの言葉が指し示す地域は、それらが使われる時代、社会といったコンテキストによって様々であるが、本論においては、帝国主義の時代からポストコロニアルの時代状況を問題にする関係上、「白人」と「非白人」を指す場合に限定することにする。このような使われ方がいつ、どのような人々が始めたかを特定することは困難なことであるが、人間が世界規模で移動するようになった「大航海時代」以降であることは間違いないであろうし、またそのような「東」と「西」という区分が世界的に非常に意味を持つことになったのが、ヨーロッパ人による「オリエン特」の研究が本格的に行われるようになった時代からだろう。

このような意味での、西欧人の意識における「東」と「西」の分析の試みについては、Edward W. Said 以来、多くの研究者によってなされてきたところである。Said は次のように規定する。

I have begun with the assumption that the Orient is not an inert fact of nature. It is not merely *there*, just as the Occident itself is not just *there*. We must take seriously Vico's great observation that men make their own history, that what they can know is what they have made, and extend it to geography: as both geographical and cultural entities—to say nothing of historical entities—such locales, regions, geographical sectors as “Orient” and “Occident” are man-made. Therefore as much as the West itself, the Orient is an idea that has a history and a tradition of thought, imagery, and vocabulary that have given it reality and presence in and for the West. The two geographical entities thus support and to an extent reflect each other.⁷

西欧において、「東」は、西欧の自己イメージに合うような「思想や想像、そして。語彙」を与えられた存在なのである。しかしながら、上にあげた引用に引き続いて、Said はいくつかの条件をつけている。西欧における「東」は、本質的に現実と何の関係もない “idea”，あるいは “creation” と結論付けるのは間違いであろうという。そして彼が問題にするのは、

⁷ Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage, 1979), pp. 4-5.

“the internal consistency of Orientalism and its ideas about the Orient (the East as career) despite or beyond any correspondence, or lack thereof, with a ‘real’ Orient”であるという。彼のいわんとする「内在する一貫性」というのは、西欧諸国と非西欧諸地域の力関係に根ざしたものである。つまりそれらの関係は、“a relationship of power, of domination, of varying degrees of a complex hegemony”であるという。そして、優位に立つ西欧人が、語らない、自己表象しない非西欧人に代わって語り、代弁表象するのである。また、“the structure of Orientalism”は、真実が語られれば吹き飛んでしまうような「嘘や神話の構造物」ではなく、持続性のあるものであるという。その際、SaidはGramsciのヘゲモニー論を引き合いに出して、西欧社会において機能する文化ヘゲモニーこそが、オリエンタリズムに持続性と力を与えるのであるという。それはまた、優れた「我ら西欧人」と退行的な「彼ら非西欧人」という集団意識を作り出しているのである。

確かにSaidのいうように、圧倒的な軍事、経済システムを持つようになった西欧諸国の文化ヘゲモニーの下で、非西欧諸地域が周縁化されたのは事実である。しかしながら、圧倒的優位に立つ国や民族が世界を「中心」と「周辺」に分ける文化的試みは、決して西欧の独創ではない。伝統的な中国の「中華思想」においても、中国以外の地域を周縁化し、地政学的位置関係を文化のヒエラルキーに投影して、「文明」と「野蛮」というスペクトルに配置するという世界観は存在した。したがって、「中心」と「周辺」という意識は、人間にとって「普遍的」に存在するといえるが、一方、西欧においては、その「他者」認識の方法は他の地域でのそれとは異なる要素が存在することも見過ごすことはできない。したがって、まず最初にこの「中心」と「周辺」という二項対立的世界観の「普遍的」側面を踏まえてから、欧米における特殊性を考察することにする。

人類は、事象を把握するのに、生得的な認識手段である、諸要素の位置関係によって類別するパターン認識以外に、認識対象を可能な限り細かく分解する分析による認識か、あるいは、認識対象に対して対立項を立てて、その対比によって意味付けする二項対立的認識をおこなう。分析的認識は、科学における中心的な認識手段であるが、これは特に19世紀になって強く意識されることになった。その一つの例として、フランスの病理学者、Xavier Bichatの言葉（1801年）を挙げる。

When we study a function, we must consider the complicated organ which performs it in a general way; but if we would be instructed in the properties and life of that organ, we must absolutely resolve it into its constituent parts. So, too, if we are satisfied with general ideas in anatomy, we must examine every organ en masse, but it is imperiously necessary to separate their tissues one by one, if we purpose to go into a minute analysis of their intimate structure.⁸

⁸ *Literature and Science in the Nineteenth Century: An Anthology* ed. by Laura Otis (Oxford University Press, 2002), p. 152.

これは人体を認識する方法を説いた個所であるが、このなかには基本認識として、人体のような複雑で捕らえがたいものであっても、構成要素に分解することによって理解することができるという考え方がみとれる。このように、19世紀になると、科学的認識方法によって世界は解明できるという信念が西欧に広がっていくのである。そしてこの分析的認識を突き詰めていけば、物質を可能な限り分解していき、最小の粒子を突き止め、その結果として、この世界に存在するものはすべて電子、陽子、中性子、中間子から構成される原子の様々な集積体とみる。しかしこれだと、「ヒト」と「サル」の差は、カラダを構成するいくつかの原子の成分比まで集約してしまう。また、昨今、その発展が目覚ましい遺伝子学においても、両者の遺伝情報の違いはきわめて小さいことが分かってきている。しかし現実には、いかなる人間の社会においても、「ヒト」と「サル」の差は、単なる肉体の形状の違いをはるかに超えて、歴然と判別されている。これはまさに、人間の一般的で伝統的な認識方法、つまり、二項対立的認識方法によって捕らえられるからである。二項対立的認識方法では、たとえ99パーセントが類似していても、それらは無視され、1パーセントの差異が問題にされる。いや、それどころか、極めて主観的な要素が付加され、それが「本質的な」差異として登録されてしまう。したがって、差異は無限に増殖されていくのである。分析的認識によれば、「ヒト」は、生物学的にはむしろ個体間の差異は捨象され、共通項に収束されていくのであるが、二項対立的認識においては、様々に細分化されていくのである。そのなかでも、人種間、ジェンダー間、そして社会階層間の差異ほど、人類の歴史を通じて増殖してきたものはないであろう。生物学的見地からすれば、肌の色の差異など極めて微細なものでしかないが、それがあたかも種の違いにまで拡大されるに至った時代もある。さらに、識別不可能な階層間や人種間においてさえ、二項対立的認識によって、その差異は容赦なく増殖される。その典型的な例は、ユダヤ人に対する差別や、同和問題であろう。

Frantz Fanon は、環境によって被差別者であることを自覚しなかったユダヤ人と黒人では、被差別者であることを自覚することになる契機にはっきりと違いのあることを指摘する。黒人の場合は、初めて白人に遭遇することによって、白人が黒人の肌の「黒さの持つ目いっぱいの重さ」でもってその黒人を押し潰すのであるという。一方、ユダヤ人の場合は、「時に周りの人間の笑いや、時にはうわさや侮辱」で真実を知るようになるという、Sartre の言葉を引用している。⁹この後者の例は、肉眼的に識別可能な差異がないにもかかわらず、歴史的・文化的に生み出された人種間の差異は、社会のなかで保持され反復されることを示している。

他方、同和問題については、島崎藤村の『破戒』のなかで、主人公瀬川丑松が同和地区出身者であることを知った彼の勤める小学校の校長が、『「見給へ、彼の容貌を。皮膚といひ、骨格といひ、別に其様な賤民らしいところが有るとも思はれないぢやないか。」』¹⁰という言葉のなかに、歴史的に生み出された階層間の差異が、生理的な差異に転化された場

⁹ Frantz Fanon, *Black Skin, White Masks* translated by Charles Lam Markmann (London: Pluto Press, 1986), p. 150.

¹⁰ 島崎藤村, 『現代文学大系 8 島崎藤村集 (一)』, (筑摩書房, 1963), 111 頁。

合を示している。

このように、そもそも主観的な差異が、生理的・生物学的な差異に転化され、パターン化され、知覚されうるものとみなされる。ましてや、肌の色などに特徴的な違いが存在する場合は、その差異は確固たるものと認識される。一方、本来、科学的認識は感覚的差異や根拠のない差異を縮小し解体するものであるが、人間の認識にあっては、パターン認識と二項対立的認識が下部構造を構成し、分析的認識は上部構造をなしているのです。しばしば分析的認識は下部構造に影響されたり、従属したりする。その結果、科学（疑似科学）は二項対立的認識が作り出した虚構の差異を補強したり、増幅して、共犯者となるのである。その一つの例が、19世紀中葉に現れた人種学で、それは、ヨーロッパ人の文化的な幻想としての人種の差異に科学のお墨付きを与えるということで、人種的偏見を押し進める推進力になったほどである。Robert Knoxは現代では悪名高い人種学者とされているが、彼がしきりに科学を強調するのは興味深いところであろう。

The earth was made for man, and man was made for the earth. The one proposition is quite as intelligible as the other. That one proposition is quite as intelligible as the other. That it was not always so we now know, thanks to anatomical research and true science. The necessary conditions of his existence were not always present; his tenancy of the globe, according to the most orthodox and best received doctrines, has been but of short duration. This is not my opinion; but I promised to consider first, in as far as I could, man as he is now, tracing him back into the unknown past as far as truth and science enable us to go.¹¹

二項対立的認識を批判的に述べたが、しかしながら、二項対立的認識を廃し科学的認識をもってすれば「理想」的な世界認識を可能ならしめるということは必ずしもいえないだろう。二項対立的認識作用は我々の実存に深く関わっていて、文化を創造し、多様化する源泉であることは否定できないのである。「美しさ」と「醜さ」、「洗練」と「粗野」、「男らしさ」と「女らしさ」といったものを解体し無化するとき、現存するいかなる文化体系も消滅してしまうだろう。「生」と「死」は単なる生理現象、あるいは物理・化学反応に還元されてしまうであろう。したがって、我々人間は、上記の3種類の認識方法から構築された世界観にしたがって、考え、行動し、創造するのである。つまり、これらの認識によって生み出された認識世界こそが、それぞれの社会の文化空間の根底にあり、文化を規定し特徴付けるものであり、そして、もし二項対立的認識が、その中核にあるとすれば、無限に増殖する差異から世界観が形成されているといえるからである。そしてその増殖が、もし主観的・恣意的であるとするのなら、それぞれの社会の文化は歴史的偶然によって形成されてきたものであり、複数の異質な文化体系が共存しているといえるであろう。一方、西欧世界で発達し、洗練されることになった科学的認識は、二項対立的認識作用によって生まれた

¹¹ Robert Knox, *The Races of Men: A Fragment* (London: Henry Renshaw, 1850), pp. 106-7.

多様で伝統的な文化空間を補完し、あるいはそれと対立し、ときには攪乱させ、社会を過去においても、また他の地域においても存在しえなかった状態へ、つまり「西欧近代」へと変質させていったのである。

4. 普遍主義者と相対主義者

これまで、差異を生み出し無限に増殖させる二項対立的認識と、差異を解体し無化させる分析的認識とは、人間存在において切り離しえないものであることを述べてきた。そしてまた、西欧近代というのは、伝統文化のなかで科学的認識が成長し、洗練され、既存の文化を補完し、修正し、ときにはそれと対立した結果生まれてきたものであることを述べてきた。いいかえれば、科学的認識が成熟してきた社会において初めて、科学的認識が二項対立的認識と対等の関係において、差異の増殖を抑制し、制御しえるようになっているのであり、その両者の弁証法的対立が、絶えず変化させる「近代化」というベクトルを生み出しているのである。

我々はここで、文化に対する見方に関して、相反するアプローチの存在することに気が付くであろう。すなわち、地球上の様々な伝統文化は、交通・通信手段の目覚ましい発達による広範囲の異文化接触に際して、自然淘汰によるにせよ、異種混交によるにせよ、ある一つの文化形態へと収束していくものなのであるという考え方と、文化の生成発展の方向性は、歴史的要因や環境因子によって決定されるものであり、決して収束されるものではないという考え方である。

これらの二つの文化認識は、2種類のタイプの人々と呼応しているのである。一方は、普遍主義者であり、他方は文化相対主義者である。ここで誤解してはいけないのは、一方が科学的認識の勝った人々であり、他方が二項対立的認識の勝った人々であるとは必ずしもいえないことである。そうではなく、同じ分析能力の人であつても、その関心が社会内、あるいは社会間の差異に向けられているか、あるいはその差異を解消する方向に向けられているかといった、着眼点の違いから生じるものである。したがって、その両極端には、極めて特殊な文化事象を普遍的なものと理解して、無理やり異文化に押し付けようとする白人優位主義者もいれば、文化間の差異を絶対的なものと信じる原理主義者もいる。

直線的に文化は進歩する——その最先端はヨーロッパ文化、あるいは文明がある——という考え方に対して、「複数の小文字の文化」の考え方を Herder が提案したことを Raymond Williams は、*Key Words* で紹介している。

In his unfinished *Ideas on the Philosophy of the History of Mankind* (1784-91) he [Johann Gottfried von Herder] wrote of *Cultur*[e]: ‘nothing is more indeterminate than this word, and nothing more deceptive than its application to all nations and periods’. He attacked the assumption of the universal histories that ‘civilization’ or ‘culture’—the historical self-development of humanity—was what we would now call a unilinear process, leading to the

high and dominant point of C18 [18th century] European culture. Indeed he attacked what he called European subjugation and domination of the four quarters of the globe, and wrote:

Men of all the quarters of the globe, who have perished over the ages, you have not lived solely to manure the earth with your ashes, so that at the end of time your posterity should be made happy by European culture. The very thought of a superior European culture is a blatant insult to the majesty of Nature.

It is then necessary, he argued, in a decisive innovation, to speak of ‘cultures’ in the plural: the specific and variable cultures of different nations and periods, but also the specific and variable cultures of social and economic groups within a nation.¹²

Williams は「文化」について歴史的・総括的に考察した初期の学者だといえるが、しかしながら、彼は認識論的側面には深く立ち入って論じてはいない。それに対して先に触れた Edward W. Said は、“Orientalist” と “non-Orientalist”——これらはここで問題にしている「文化相対主義者」と「普遍主義者」とに完全に対応している概念とはいえないが——について、*Orientalism* において深い洞察を示している。Said は Orientalist の一人であるフランス人 Caussin de Perceval の Mohammed 研究が、Mohammed を冷ややかに眺め、彼の「絶大な宗教的力や、西欧人を脅かすようないかなる残存するパワー」を取り去り、矮小化していると述べた後で、次のように “Orientalist” と “non-Orientalist” の関係を語っている。

Both Caussin and Carlyle, in other words, show us that the Orient need not cause us undue anxiety, so unequal are Oriental to European achievements. The Orientalist and non-Orientalist perspectives coincide here. For within the comparative field that Orientalism became after the philological revolution of the early nineteenth century, and outside it, either in popular stereotypes or in the figures made of the Orient by philosophers like Carlyle and stereotypes like those of Macaulay, the Orient in itself was subordinated intellectually to the West. As material for study or reflection the Orient acquired all the marks of an inherent weakness. It became subject to the vagaries of miscellaneous theories that used it for illustration.¹³

このように、Edward W. Said は、西欧における文化ヘゲモニーを鋭いメスでもって分析していて、“Orientalist” と “non-Orientalist” の言説に一貫して流れる「弱く、劣った東」という共通認識の存在を主張しているのである。確かに彼らの共犯的關係を指摘した Said の分析は、

¹² Raymond Williams, *Keywords* (New York: Oxford University Press, 1976), p. 89.

¹³ *Orientalism*, pp. 152-3.

米人の世界認識を研究する上で画期的なことであったのであるが、しかしその負の側面を強調しすぎて、西欧近代において分析的認識が発展し、洗練され、異文化に対する認識のゆがみや誇張が矯正されていった面を軽視している。実際は、単に西欧の強大な軍事、強固な経済システムを背景にして、“Orientalist”であろうと“non-Orientalist”であろうと、彼らの言説において「東」を意のままに作り上げていっただけではなく、彼らが論争し、ぶつかり合うことによって、西欧の言説のなかに変化という血を絶えず注入していったのではないか。そしてさらに、そのような西欧の言説に接した非西欧人に深刻な影響をもたらし、彼らの偏狭な世界観を押し広げていった面もあるのではないか。つまり、単に硬直した、二項対立的な「加害者」と「被害者」の枠組みではこのいわゆる「近代世界」を捕らえることができないのではないだろうか。そのことは、西欧に接した日本人の精神的拡大と深化をみれば、明らかであろう。したがって、西欧社会の言説において、「一貫性」だけではなく対立・変化のファクターを、そして非西欧社会に対する西欧の抑圧とともに、変化の起爆剤としての側面を同時に観察する必要があると思われる。

文化研究において重要でありながら非常に困難であるため、実際これまであまり取り組まれてきていない問題は、研究対象と、それをみる研究者との極めて錯綜とした位置関係を如何に捕らえるかということである。本論では、研究者——つまり「東」といわれる地域の出身者である筆者——を常に相対化する試みを行いながら、次回の号において、イギリスにおける普遍主義と相対主義の一つの現れとしての Orientalists と Anglicists の論争を分析し、それらが 19 世紀イギリスにとってどのような問題をはらんでいたかを考察し、そしてそれとの比較として、日本における欧化主義者と日本主義者も念頭に入れることとする。この過程で、筆者自体を他者化し、相対化できればいいと思っている。